現代日本文學全集

29

里見弴集

佐藤春夫集

佐藤春夫集

里見弴集

杉浦非水裝幀

改造社版

昭和二年八月一日印刷
昭和二年八月五日發行

現代日本文學全集　第二十九篇

著者　里見弴
著者　佐藤春夫

發行者　山本美
東京市麴町區內幸町一丁目參番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市麴町區內幸町一丁目參番地
幸ビルディング壹階
振替東京八四〇二番
電話銀座一七三三番
銀座四五八五番
銀座五〇四六番

株式會社秀英舍印刷

「里見弴集」目次

巻頭寫眞（照影）

序詞（筆蹟）……四

多情佛心（前篇）……五

多情佛心（後篇）……一四七

椿……二八八

父親……二九一

銀二郎の片腕……三〇三

善心悪心……三一三

年譜……三三五

「佐藤春夫集」目次

巻頭寫眞（照影）

序詞（筆蹟）……三四〇

田園の憂鬱……三四一

都會の憂鬱……三九九

お絹とその兄弟……四七六

星……四九三

女誡扇綺譚……五一二

西班牙犬の家……五二七

窓展く……五四二

一夜の宿……四八

年譜……五五六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

里見弴集

私の句は、きて来る心を物を正しく観、
はつきり感じ、遂にその真髄にまで
突き入り解らうと思ふ。私の一生を
解ることに捧げ尽してゐる者だ。
従て小説を書く動機もそれで。
解りたい為に書き、解りつゝあるを思へばこそ
書き、解り得たと信じられればこそ
筆を執ることにあるのだ。

昭和二十年初夏

玉見 孫

多情佛心（前篇）

序詩

あさ

しら〳〵と明けはなれて行つた。
涼しげに小鳥が唄ひだした。
見渡す草原は朝露にうるほひ、早起の花ども悉く振り仰いだ。
大枝小枝を張つて、欅の老木は思ひきり伸びをした。
まづその梢から、旭に照り映えたと見るまに、空は、深まさり、蒼み亙つた。
勢よく、鳥の群が出かけて行つた。
陽の色と、朝の匂に染まつた空氣の、どく微な流れが動いた。
窪地の古池だけがまだ眠りこけてゐた。鰭には搖れず、蛇にも過られず、翡翠も掠めず、落葉も浮べず、沼氣さへもあぶく立たなかつた。
たゞ寂として、もの皆の影を映してゐた。
そこに、緩い傾斜を、男の子が駈けおりて來た。赤い、はち切れさうな頰、圓眼。
續いて女の子は、草露に、ちよいと裾をたくしあげ、あちこち拾つて、ピョイ〳〵と跳ぶやうにしておりて來た。
上の平地に立つてゐる欅は、もう根本まですつかり日射のなかにあつた。それでも、坂を下り、池を渡つて、對岸の土手の上までも、長い影を落すやうな斜光が、子供たちの立ちどまつたところへ、末廣がりの縞になつて、眞正面からさしてゐた。
男の子は、ぢつとその光の縞を見詰めた。池の面から立ち騰る水蒸氣が、そこへはいると、ほのぼのと眺められた。
「あら〳〵、ぐちよ濡よ」
女の子は一目うすべりの色を見てさう云つた。土瓶、土釜、錫の鍋や皿、茶碗、どれもこれもせい〳〵大きくてマッチ箱ほどしかない臺所道具が、濡れとほつて、褐ッちやけたうすべりの上に散亂してゐた。なかには、草の葉を盛つたまゝの皿があつた。葉は、ペショ〳〵に、萎ずみ凋れてゐた。
「だからあたし、うちに持つて歸つとかなくつちア駄目だつて云つたのよ」
「ぢア持つて歸りやアいゝのに……」
「だつてほつたらかしといても大丈夫だつて云ふんですもの」
「誰がさ。……僕アそんなこと云つた覺えないよ」
「ぢア美代ちやんだつたかも知れないわ……」
「だつていゝぢアないか。どうもなつてやしないぢアないか」
やつと、光の縞から目をはなして、うすべりの方を振向くと、「ほら、一つだつてなくなつてやしまい？」
「なくなつてやしないけど、これぢア坐れやしないわ」
「いゝよ、今ぢきに乾くよ。……だけど、僕ア今日ははいんないぜ」
「なアぜ」
「まゝごとなんてつまんないや」
「あらア……」
「だつてさうぢアないか。まゝごとなんて、男のすることぢアないもの」
「一意地惡根性ねえ」

「なにが意地悪だい」
「だつて、昨日まで仲間にはいつてゝ……」
「そいだつて、いゝぢアないか……」
「えゝ、いゝわ」
「なアんだい。なにがいゝんだい」
「だからいゝことよ。今日はなんかほかのことして遊びませう。ねえ？　そんならいゝでせう？」
「……うん……」
「清ちやんみたいに、すぐそんなに本氣になつて慍るのいやだわ。ね？　仲よくしませうね？」
陽がのぼるにつれて、空はいよ〳〵色を深め、樹々の若葉は光り輝き、寢坊な池水も、爽かな朝風の訪れに、漣の微笑を反して、もの皆の倒影を、だんだら縞に搖り動かした。つれ舞ふ蝶は、高く低く野花を掠めて、やがて見えなくなる……。
どこか遠くで鶏が鳴いた。
男の子は、なんとも云はずに、ふと女の子の眼を見た。女の子もぢツと見返した。
どこか遠くで、もう一度鶏の聲がした。
たゞなんとなく、うら悲しいやうな心持になつて來て、男の子は目を野末に放つた。女の子は、膝の上に兩袖を重ねて、淋しくそこへ蹲む

と、錫の皿をとりあげて、凋れた草の葉を摘み捨てた。皿の中は濡れてゐた。
ほそ〴〵と吐息をついた。
「あめいばうを掬はうか」
眞面目くさつた顏つきをして、男の子は池の面を見詰めてゐた。
「……え？……。ねて？」
女の子は、强ひて快活に、立ちあがると、すぐ男の子と肩を並べて、「でも、なんか掬ふものがなくつちやア……」
細い足のさきにちよつと水を窪ませて、スウイスウイと居どころを變へる小蟲が、ひとしほ少年の心を淋しくしてゐた。
「……うん……」
今度は、意識的に向き直つて、丁度同じ丈格構の女の子を、正面に見た。
「……？」
小首をかしげて、娘の子もぢツと見返したが、瞳と瞳とがきツちりあつて、一二秒もすぎないうちに、男の子は、ほとんど澁面をつくつて、
「もう歸らうか」
「……えゝ……」
と、微に、うち頸垂れて答へ、暫くしてから、「……なんか慍つてるの？」

「うゝん、なんにも慍つてなんぞゐやアしないさ。だけど、……ごめんね……！」
「あら！　なぜあやまるの」
「僕、意地悪いつてごめんね」
「まアいやだ。清ちやん、ちつとも意地悪なんぞ云やアしないわ。それよか、あたしこそごめんなさいね……」
もう一度、瞳がピタリとあつた。いつどちらから寄つたともなく、二人は、鼻と鼻とが觸れ合ふばかりに近く立つてゐた。
男の子は娘の、娘の子は少年の、瞳のすぐうらに、自分のとまつたく同じ心を見た。もう羞かしさも何もなかつた。相手と目を見合せてゐるのではなくて、今はたゞ自分を見詰めてゐるのだつた。
――その自分は、泣きだしたいほど嬉しがつてゐ、淋しくなるほど甘えてゐ、身ぶるひが出るほど眞面目くさつてゐた……。
紺青の朝空も暗み亙り、欅の老木は葉をふるひ枝を垂れ、池水は汐の如くひき、小鳥の唄も蝶の舞も消え行くよとばかり、世はこゝに、二人の小さな心の上に蹙り凝つて、たゞしんしんと耳のはたに鳴つた。そして、これが、夢ではなかつた。……時が飛び去り、時が飛び來

つた。

涙がおのづと溢れたと思ふ間もなく、お互の顔がぼやけて行つて、睫につたはる水玉には、大空の光りが映り輝き、硝子の破片から窺いたやうに、滅茶苦茶なもの、影ばかりが、キラキラと搖れ動いた……。

それで、少年が恥しいと思つた。

くるりと背を向けて、手の甲で洟水を啜りあげると、そのまゝ少年は土手を駈けあがつた。風に切れて、涙が揉上の方へ飛んだ。あがりきつたところで、駈けながら振り返つて見た。池を背に、女の子が、ぽかんとこつちを見上げてゐた。いつの間に出たのか、眞ッ白な雲が一つ、くッきり水の面に浮んでゐた。ちよつと立停まらうとして、よして、そこからは、わざと二三歩おきに跳びあがるやうな駈け方をして、榛の木の林の方へ行つた。もとよりそこに、なんにも彼を待つてゐるものがあつたわけではない……。

後姿が見えなくなると、急に女の子は悲しくなつて來た。ひとり置いて行かれたとか、こつちを振り向いて顔を見合せながら、立停りもしずに行つて了つたとか、そんなことで悲しくなつたわけではなかつた。それどころか、男の子の心持が、――草土手を駈けあがつて行く時の心持が、すつかり自分の胸へも映つて來て、うれしくつて、……嬉しいからこそ悲しいのだつた。

母親の乳よりも甘い涙が、止めどもなく、あとからあとからと流れて來た。ペタンと草の上に坐つて、袂を顔にあてた。草や濕つた土の匂が、清々しく鼻の穴へしみ込んで來た。

いやよ〳〵いやよ、清ちやんいや、いや〳〵いや！　どこからともなく、さう云ふ言葉が浮んで來て、たゞもうかぶりを振つてゐたかつた。隈もなく滿ち足りた心が、何故か、「いや！」と云ふ言葉を叫び續け、何かもつと辛いことを欲した。そして、悲しさうな涙が止めどなく溢れた……。

泣けるだけ泣いたあとは、心持が急にカランとして、輕く面白くなつた。すぐ男の子のそばへ行かうと思つた。そんなに遠くへ行つて了はないことは、よく解つてゐた。それでも、目のふちが赤く泣き腫れてゐはしまいかと思ふと、きまりが惡くなつた。袖口で、抑へつけるやうに、もう一度よく目のまはりを拭いてから立ちあがつて、ひよいと上の方を見ると、男の子の頭だけが、土手の上へ出てゐた。

「いやア一

思はず大きな聲をだして、うしろ向に、草の上に突伏たが、すぐまた身を起すと、兩袖に顔を隱したまゝ、「ひどいわ、そんなとこから默つてみてるなんて……」

と云ふ聲に、けれども、喜びが滿ちてゐた。少年は、すぐ傾斜の上きに跳んで出て、駈下りようとした足を止めた。

「あのね、仙ちやん、こつちいおいでな、いゝ花が澤山あるところを見つけたから」

「あらさう？　ほんとう？」

「嘘なんぞつきアしないよ。……早くさ、早くおいでつたら……」

促し立てられるまでもなく、もう娘の子は、どん〳〵土手を駈けあがつてゐた。ほとんど鳥瞰的に見おろしてゐた少年の心は、輕く、明るく、そして愉快だつた。草深いところへかゝつて、歩き憎さうに、それでも一刻も早くと、肩を搖つて大股にあがつて來る、――自分ならばひとつ跳びだ、と思へば、ひとりでに微笑さへ浮んだ。

あがりきつた女の子が、その微笑してゐる少年と顔を見合せると、すぐこれも微笑つて目をそらした。

「おゝ苦しい」

眞ッ赤になつて、ハア〳〵息をきらしてゐた。男の子は、迎へよつて、手をとると、いきなり一散走りに駈けだした。首がうしろへガクンとなるほどに、腕が抜けるほどに、力一杯引ッ張られて、女の子も夢中で駈けた、二人の足は、夏草よりも、むしろ宙を踏んで……。

よる

蒼暗い空に、凍てついた星の數はたんとでもなかつた。

風は風ぎ、大氣は冷えきつて、轍のあとをそのまゝに、往來が石になつてゐた。

高く低く空を劃つた屋根の下に、家々は大方もう戸を鎖して、藥屋、唐物屋の飾窓、蕎麥屋の腰高障子、小さな煙草屋の、うちから金布の幕を引いた硝子戸、自動車屋の車庫場、――幅をもつた火影とては、さうした店の前にしか流れ出してゐなかつた。濕氣の涸れ果てた空氣には、軒燈や看板の照明はにじみもしずに、ポツンポツンにべもなく續いた。

兩輪はづして立てかけてある手車のそばから、のそりと起きあがつた犬が、用ありげに、電車通りの方へ出かけて行つた。そつちの空には、カアン〳〵と、金槌の音が響いてゐた。

釣鐘マントと、鼻のさきまで肩掛を卷きつけた束髪と、二人の姿が一つに塊つて、五六軒しもた屋の並んだ薄暗がりから、錢湯の、高山の景色を描いた看板を照す五十燭ばかりの灯の下に現はれて來た。首をすくめ、前こゞみになつて、小刻みに、陸摩下駄と薄齒の足音が揃つてゐた。束髪の頂が、丁度、深くかぶつた鳥打帽で、いくらか押しひしやげられた耳と、すれすれの高さだつた。

角を一つ曲ると、支那蕎麥の屋臺がズルリズルリ動いて來た。ほんの心もち二人の肩が離れて、すれ違ふと、脂ッこい肌からでも立ち騰つたやうな湯氣に、生溫かく二人の頬が舐められた。

「クフン」

息で鼻の穴を清めてから、「臭いな」

「えゝ、ほんとに……」

それきりで、二人はまた前の沈默に返つた。往來は、だん〳〵淋しい屋敷町になつて行つて、薄齒の音が冴え、響き亙つた。

「だけど……」

五六歩も歩いて、まだ男はそのさきを云ひ出さなかつた。

「だけど、なアに？」

「やつぱり僕、送つて行くだけにしようよ」

「あら、なアぜ？」

「惡いもの」

「あら、ちつとも惡くなんぞありやアしないわ」

「だつて、今時分から行つて、寢床やなんか、……小舟さんに惡いや」

「ちつともそんな心配いらないわよ。うちぢア、しよッちうお泊りのお客樣があるから、いつだつて二階の押入にちやアんと用意がしてあるんですもの」

「だけどね、なんだか……」

またそれきり默つて了つたので、娘は顏を覗き込むやうにして、

「どうしたの？　そんなこと云つたつて、第一今時分から歸れやしないわ」

「歸れるさ。まだひよつとすれア赤電車に間に合ふかも知れないし、なけれア俥を探すよ。俥もなけれア歩いたつて知れたもんだ」

「あら、歩いちア大變だわ。そんなこと云はないで、泊つていらつしやいよ。歸つたらすぐに電話でうちへさう云つとけばいゝんぢアないの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「だつて、隣の電話だからね」
「構やアしないわ。まだやつと一時かそこらでせう。あたしなんぞいつだつてほんとに眠るのは二時三時よ」
「それアね、電話なんぞ明日の朝だつて構やアしないんだけれどもね……」
「ぢアなにがいけないのよウ」
娘の聲音は、いかにもじれつたさうだつた。
「だつてさ……」
また云ひ澁つてゐたが、思ひ切つたやうに、あとが早口になつて、「小舟さん、へんに思やアしないかしら」
「へんとは……？」
「今ごろ二人ッきりで歸つて來たりして……」
「だつて、それア、あなたが門のとこからすぐに歸つて了つたとしても、あたし阿母さんに話すわよ。今時分一人で歸つて來たなんて云へば、それこそ叱られちまふわ。へんに思はれるどころか、あなた親切だつて、きつとお禮を云はれるくらゐなもんよ。そんなこと、ちつともなんともありやアしないぢアないの」
「お禮を云ひながらだつて、へんに思つてないとは限らないからね」
「ぢアいゝわ、どうでも勝手になさい！　さつき泊つて行くつて云つといて、男のくせに……」
「なんだい、送つて來たり慄られたりしちア合ないや」
「慄つてやしないけど……」
「ぢア、いゝよ、泊つてくよ」
「きつとね！」
肩の丸味で念を押してよこした。
「その代り、へんに思はれたつて知らないよ」
「えゝ、いゝわ、構やしないわ」
「よし！」
と云ふと、青年は、マントの下から手を出して、娘の手を求めた。待つてゐたやうに、すぐ堅く握り合され、「きつとだね」「えゝ」「うれしい」「あたしも嬉しい」――そんな風な言葉が掌と掌とで囁かれた。
手を握り合つたまゝ一二町行つて、或る冠木門の前に立つた。丸火屋の薄い光の下で、二人は、正面に目と目を見合せた。――すぐ、莞爾とほころびた脣の上に、慄つたやうな眞面目な青年の顏が伏さつた……。
突然、半鐘が鳴つた。
無言で、意味深げな眴を取交すと、急いであけた耳門を、娘から先にはいつて、一二間小砂利を踏んで内玄關へ來た。戸が一枚だけ引き殘してあつた。
「千代や」
格子の鈴を鳴してはいるなり、憚りのない聲で、「ちよいと、火事だよ」
女中が二人とんで出た時には、娘はもう上へあがつて、肩掛やコオトをかなぐり捨ててゐた。
「お歸ンなさいまし」
「阿母さんは？」
「お茶の間においでなさいます」
「堀さん、あなた早く二階へ行つて、どの邊だか見て來て頂戴よ」
云はれて肇て、沓ぬぎに立つてゐる青年に氣がついて、
「あら、……いらつしやいまし」
と、もう一度ぺたんと坐つた女中たちに、
「誰でも、そこのスキッチをひねつて、堀さんをお二階におつれしておくれな」
さう云ひつけて置いて、娘はあたふたと廊下を茶の間の方へ行つた。帽子やマントを一人の女中に渡し、もう一人のに導かれて、青年は足早に梯子段をあがつた。火事のおかげで、いきなり茶の間へつれ込まれないですんだのを、心ひそかに喜んでゐた。

「なに、二つ番だから大丈夫だ」
押入から座布團を出さうとしてゐる女中へともなく呟いて、階段をあがり切つたとツつきの高窓をあけてみた。
「やア、燃えてる〳〵」
斜右手の空に、まだ始まつて間もない火の手が、赫々と、鮮かに眺められた。
モク〳〵と力強い弧線を描きながら紅に、朱に、樺に、黄に、紫に、刻々色を移して立騰る煙や、あふりを食ふ度にぱッと捲き起る火の粉の、ちらめく金砂子となつて消えて行く空には、月もなく風もなく、星屑さへも稀に、たゞ寂寞たる冬が凝つてゐた、――半鐘の音が、とんだ慌て者に聞えるほど、寂まり返つてゐた。それだけに、遠い物音、人聲が、たゞひと色に、唸るが如くに聞えて來る。青年は、なんとも云ひ表しやうのない、たゞ(やア……)と云ふやうな感動で眺め入つた。なかに一つ、(綺麗だ！)と思ふ心だけは、はつきりしてゐたが……。
「どの邊でございませう」
女中がうしろに立つて云つた。
「さア、××あたりかな、それとも、もうちつと遠いかも知れない」
「見えて？」
勢よく梯子段を駈けあがりながら、娘は聲をかけて、「どのへんなの？」
續いて娘の母親が、しと〳〵とあがつて來た。薄暗い廊下で、立ちながら挨拶を交せばすむことを、この偶然の出來事に、もう一度感謝しながら、すぐ青年はそばへよつて、
「小母さん御無沙汰いたしました」
「どうも、實さん、お世話さんでございました。もつと早くお暇すればいゝのに……。寒いところを態々送つて頂いたりして……。あなた、今夜泊つていらつしやるね？　えゝさうなさい。ほんとうにお氣の毒さんでしたね。……どう？　火事は見えますか」
すぐ話が、どの邊だらうの詮索に移つて、母親を中に、三人首を並べて眺めてゐたが、その見當に住んでゐる知人を思ひ出すと、まだそこにゐた女中に、交換局に聞き合せろと命じながら、一緒に階段をおりかけて、
「ぢや、今すぐ床を延べさせますからね。あたしは御免かうむつてお先にやすみますよ。……お主ちやん、お前さんいつまでも窓から顔を出してゝ、風邪でもひくといけませんよ」
と、母親は云ひ殘した。
丁度胸の高さの窓に兩肘を置いて、それから暫くの間二人は默つて眺めてゐた。――火事からうける感動は、決して永くは保たなかつた。もつと盛に燒ければいゝ、さう思ふ心で、やつと自分を紛らさうとした。然し、やがて二人の心は、まつたくそこから離れて了つた。眼だけが、たゞぼんやりと美しい火の舞を見詰めてゐるにすぎなかつた。
……いつの間にか、肩と肩とがぴつたりと押しつけられてゐた。今度は、マントとコオトとの厚みだけへつてゐた。その上、歩行によつて動かされなかつた。靜に……靜に、いろ〳〵のことが感じられた。
青年は震へ戰く足を組み違へ、片一方を爪先立てた。薄べつたい甲が、その爪先の下に敷かれたが、動かなかつた。そろ〳〵と踵からおろして、たうとう蹠が、ペタリと重なつた……。
決して顏を見合せなかつた。眼は、寂寞を極めた冬の空に舞ひ飛ぶ火の粉を追つてゐた。チラチラと、それは眩暈ばかりだつた。……時が飛び去り、時が飛び來つた……。
青年の腕が、横抱に娘を抱いた。娘は、脅えたやうに、顫へる息を深く吸ひ、靜にそれを吐き出しながら、むかう向に、窓框に置いた肘の上に、ぢッと面を伏せて了つた……。

病氣見舞

一

口の贅澤な實業家の常連で、夜よりも晝の繁昌する青嵐亭の食堂も、一時を廻るともう閑散だつた。階段をあがつたとツつきの帽子臺に掛けきれないで、そばの卓にまで積みあげてあつた帽子や外套が、今は數へるほどしかなく、角帶前掛と云ふ變つたこしらへのボオイたちも、まづ一服と云ふところで、カアテンの蔭に姿をかくして了つた。どんよりと曇つた空の光りは、煉瓦地の、明治初年風な、窓の小さい建ものゝ室内を、しめやかに小暗く見せてゐた。

赤い房々とした髭を揉みあげながら、外國の紳士が、トイレットルームを出て來て、つれの日本人を促して歸つて行くと、あとはもう一組しか殘らなかつた。――歳尾近い午後の氣配は、荷馬車の輸音にも沁んで、なんとなくあたりがひつそりする……。

「……と云ふわけでね、この取組は、あツしやアきつと面白からうと思つてるんだ」

壁いつぱいに片寄せた小さな角卓子に頬杖をつき、左で、半分以上飲んだホット・ウヰスキイのグラスを弄びながら、かう云つてぢツと相手の顏を窺き込んだのは、色の淺黑い、角刈にした美貌の若者で、素人では、いくら二十七八と見えるその年ごろにしても華美すぎる、赤入の唐棧柄の結城を、羽織だけ少しあらめに織らして、すらりと延びた體に、ぴつく着流してゐた。

差向ひに、これは生のウヰスキイと炭酸水を前にして、薩摩の蚊絣の揃に、ほとんど無地と見える結城の袴を穿き、若白髮のまじつた粗剛さうな毛を、分けたとも搔き上げたともつかずモシャクシャさせ、胃弱らしく青黃色い、彈力を失つた皮膚を脂らぎらせて、少しすわりかけて來た眼で、疑ひぶかく見返しながら、ニヤリニヤリしてゐるのは、つい近頃賣出した劇作家の三好胤夫で、明けて三十にならうと云ふ青年だつた。

然し、一體君は、それを誰から頼まれたんだい。まさか當人からぢかぢアあるまい？」

「いえ、それアなんですよ……」

「女將さんだらう？　君アあれを願つてるね？」

どうだ、睨んだこの眼に間違ひはあるまい、と云つた調子で、骨太な、厚ぼつたい胸をぐつと椅子の背に反らして、下目に見据ゑたが、相手は、嚙んでほき出すやうに、

「じよ、冗談いつちアいけない！　いくつ違ふと思つてるんです」

「年齡の違ひを問題にする市川瀧十郎か知ら」

云ふなり三好が、甲高い引笑ひに笑ひ崩れるのを、てれ隱しの、さそくの頓智に、ボオイ部屋の方を窺つて、右で、形をつけて抑へ、

「シー。……隱密々々」

それから急に眞面目顏になつて、「然し、それア先生、……なんぼなんでも、あれアどうも……。それアあんまりひどいや」

「さうか知ら、そんなに云ふほどか知ら。……君、なんだぜ、別に何も謙遜する必要はないぜ」

「いけませんよ、揶揄つちア」

「だつて……」

「あツしやア、さうならさうと正直に云ひますよ。そんなこと、先生に隱したつて仕樣がないぢアありませんか」

「ところが……」

「まアさ、さう云つてお土砂をかけられたら、すなほに、成程それもさうだ、と思ふやうでなくつちア……」

「なくつちア？　どうだつて云ふんだい。粹な

人ぢアないつてえのかい？」
「いゝえ、どういたしまして。……とても出世は覺束ない……」

二

それで、二人聲を揃へて笑つたが、三好はあたりを見廻して、
「なんだか馬鹿に暗くなつて來たね」
濃緑の壁紙が、光りを吸ひとつて、部屋の空氣はしつとりと暗み、早くも夕方が迫つたやうな心持だつた。瀧十郎は、左の袖口をちよいと押しあげて、親指の頭ほどの腕時計を見てから、椅子をずらせて窓近く額をよせた。
「ちつと暖かすぎると思つてたら……、こりやアきつと雪ですぜ」
「さうさねえ……」
誘はれて空を見上げながら、「同じ降るなら雨ぢアつまらない」
「然し雪だと、またこれでお物入です」
「何を！　役者の云草ぢやアないぜ」
云はれると、有繋にちよいとてれて、瀧十郎は、ホット・ウヰスキーを一口飲んで、
「時に、肝心な話がどつかに飛んでつて了ひましたが、紀尾井町さん、どうでせう、出て來てくださるでせうか」
「それア、うちにゐさへすれア、大將のことだから、大抵出かけて來るだらうけれど、……一體、どうする氣なんだい、こゝへ來て貰ふのかい？」
「さアそいつですよ。どつちがいゝでせう、ぢかに彼方に來て頂いた方がいゝかしら」
「だつて君ア、女將さんに、見舞に來いつて云はれてる人だらう？　さうとすれア、いづれ女將さんの臥てゐる部屋に通される……」
「それをあツしが助けて頂きたいんですよ。すツとお客であがつて置いて、ちよいと二三十分階下に顔出しをして、今日は三好先生と御一緒だから、つて云ふやうなことで、すぐ逃げ出して來よう、――ま、正直な話がさう云ふ意氣なんですから……」
「おい、いゝ加減に馬鹿におしよ。なんぼ俺が附合がいゝつたつて、女よけの呪禁にまで使ふこたアないだらう」
「いゝえ、さう仰有るとものに角が立ちますが……」
「どう云つてみたところで、それに違ひないぢアないか。つまり、いろにはなまじ連は邪魔、あれの丁度正反對の場合だアね……」
「ぢア、可厭な女には却つて連が要る、ですか。惡い語呂だな」
「それもいゝが、君つてえ人は、惡くすると階下へ行つて『銀座通りでバッタリ三好さんに出つくはしちまつて、どうしてもまけなかつたから、仕方なしに一緒につれて來た』ぐらゐの嬉しがらせを云ひかねないんだから、こいつ、なんぼなんでも役が惡すぎらアね」
「あ、あれだ！　なんぼなんでも、あツしやアそんな人の惡いまねはしやアしませんよ。それアあんまり殘酷だア」
「ところがね、ほかのことゝ違つて、事ひとたび女に關すると、忽ち友情もへツたくれもなくなつちまふんだから……」
「誰が、あツしがですか？」
「いゝえさ。誰彼と云はないでも、凡そ男つてそんなもんだらうぢアないか」
「それア先生、こつちからかゥかと逆上あがつてるやうな時なら、それアそんなこともないとは限りませんけど、何しろ相手があれぢア……。これが妹さんの方なら、またつてこともあるが、こつちでさう思ふ人は、たゞの一遍でいゝから紀尾井町さんに逢はせてくれッてんで、まるで草双紙にでもありさうな惚れやうをしてゐるんだから……」

「あの人、なんとか云つたね」
「お澄ちやん……」

三

「あゝさう〳〵、お澄さん……」
三好はエアーシップに火をつけて、なにかひとりでニヤ〳〵しながら、「あゝ見えて、もう二十二三だらうね」
「いゝえ、一ですつて。それであなた、まだ男を知らないつてんだから……」
「そいつアどうも……、なんてつたつてうちの商賣が商賣だし、あんまり當にならないが、先刻の君の話のやうだとすると、兎も角大ぶん古風だね、今時そんな……二十一にもなつて、芝居でたつた一遍見かけたつきりの男を忘れかねて、くよ〳〵してるなんて娘さんが、今時實際にあるもんかねえ、ちよつと信じられないくらゐだな。おまけに見初められたのが、藤代の信さんとはね……」
「だからあツしやア、この取組はきつと見物だらうと思つて、是非とも今日は紀尾井町さんを引つ張り出すつて云つてるんですよ。どうです、これア先生も粋成でせう？」
「だつてお澄さん、めつたに座敷になんぞ出て來やアしないぢやアないか」
「めつたにどころか、絶對に出やアしませんよ。あれで、あの姉さん、中々やかましいんですからね」
「それぢア、揃つて出かけてみたところで仕樣のない話ぢアないか。たゞ晩飯を食ひに行くだけのことなら……、君の前でさう云つちアなんだが、あすこは大してうまかアないぜ」
「それアいつもならさうですけどさ、藤代さんが見えたとなりやア、お澄さんが出てお酌だつてしてくれない限りぢアありませんからね。それアもう女將さんだつて承知だし……」
「そんなやかましやの姉さんが、よくまたそんな浮いた話を平氣でゐるね」
「浮いた話どころですか。さつきも云ふ通り、思ひつかなきアいゝつて、みんなが心配してゐるくらゐですよ」
「本當かい？」
「誰がそんなこと……」
「いや、嘘だとは思はないが、一體君の話は大袈裟だから……」
「ぢアまアよござんす。行つてごらんになれば分るこつてすから」
「ふん、さうかねえ。ちよいと見たところぢア、仲良さうで、相應お洒落で、戀患でもしようつて風にア見えないがね」
「兎に角そいぢやア、紀尾井町さんへ電話をかけてみませうか」
「かけ給へとも。かけるくらゐなら、ちつとでも早い方がいゝよ」
「ぢア、勿論先生は附合つてくださるんですね」
と、椅子を立ちあがりながら念を押して、「然し弱つたな。あツしやアこのごろ、すつかり奥方をしくじつてる人なんだから……。先生、矢ツ張りあなたの方がいゝや。すみませんが、先生かけてくださいませんか」
「駄目々々！　俺なんぞなほ駄目だよ。細君の信用、ほとんど零だからね。役者と云ふだけでも、君の方がずツとましだよ。それアなんてつたつて、役者の魅力つてものは大したもんだよ、それア矢つ張り君の方がいゝよ」
「へんなこと云ひつこなしにしようぢアありませんか」
「まア〳〵、そんなこと云はずにやつてみ給へ、きつと大丈夫だから」
苦笑ひをしながら、瀧十郎は立つて行つて、部屋の隅にある電話にかゝつた。

四

やがて先方が出て、取次の女中がひつこむと、

瀧十郎は、大きな目の玉だけをギョロリと三好の方に向けて、

「お宅でしたよ。……もうこつちのもんですね」

と、ニコ〳〵するのを、三好は故意と冷淡に、たゞ鼻のさきでフンと笑つてゐた。

「あ、もし〳〵」

暫くすると、電話口で、いくらか聲の調子をとり繕つて、「えゝ旦那様でいらつしやいますか、手前瀧十郎でございます、誠にどうも御無沙汰ばかりいたしまして……」

片手を懐に、横着な顏つきをしながら、そんな風に言葉ばかり馬鹿丁寧にやつてゐるのを見ると、有繋に三好は、ちよつと可厭な氣がした。まさか喜出しの花形役者が、挨拶の言葉につれて、電話口でピョコ〳〵頭をさげるほど律義であらうとも思ひはしないが、旦那さまだの手前だのと、ふだん顏と顏とを見合せては決して使ひはしない他所行き調子をもち出すにも及ばなからうに、へんな奴だ！　ぐらゐの氣持で、苦々しげに日を逃らした。すると彼方の電話口に出てゐる人にも同じやうに感じられ、それを云つたとみえて、急に瀧十郎が大聲に笑ひだしながら、

「……へ、へ、これアどうも……へ、誠に相濟みません。あゝ、相濟みませんもいけないんですか。ぢアもういつそ引拔きになつて、フーさん、あツしですよ、とやツつけますか。……え？　えゝ、明日が顏寄です。……えゝ、さうです、今度はわりに樂です。でも、大喜利につかまつてますから……。え？　御冗談でせう！　そんな筋があれア……」

やゝ暫くそんな冗口ばかり利き合つてゐたが、潮加減を見計らつて、晩の食事を木挽町のよし野で附合つてくれないか、今は三好と一緒に青嵐亭にゐるが、來てくれるなら、二人ですぐ彼方へ行つて待つてゐるから、と申し出たが、相手はいろ〳〵愚圖ついてゐるらしかつた。

「……なにも、御存知ないうちだつていゝぢやアありませんか。いつかもあたくしから、一度お願ひしたことがあると思ひますよ。そこの女將が大へん贔屓にしてくれますんで……。え？　義理の御附合なんぞ御免だ？　そんなこと仰有らないで……。いゝぢやアありませんか、たまにはこんな顏でも立ててくださるもんですよ。……え、分らない？　いゝえ、すぐ知れますよ。もしなんなら、こちらからお迎ひの自動車を差上げませうか。……あゝ、さうですか、成程……、また明夜あたりお宅をおあけなすつたんぢやアないんですか？……いゝえ、あてになるもんですか。……冗談は冗談として、ほんとに今夜だけは、ひとつあたしに體を貸してくださいませんか。……あれだ、とてもかなアない！……ぢやアね、三好先生に出て頂きますからね。……えゝ、とてもあたしぢやア駄目さうですから……。いゝえ、いけません〳〵！……ぢア、ちよつとお待ちくださいまし……」

受話機をひツかけるところを、右手で抑へて、振り向くと、

「先生、どうかひとつ……。なんだか知らないが、とても頑强ですよ。あなたにお任せしますから……。懸賞をつけてもいゝ……」

「なんだい。君もまた馬鹿な熱心さだね」

「えゝ、もうかなれア意地づく……、腕づくでも……」

五

「電話の腕づくはちつと無理だらう」

云ひながら三好は、さも不承無精らしく椅子を立つて、若い役者の手から受話機をうけとりに行つた。「僕ア然し、一應は勸めるが、もともと厚外中立の立場だからね、責任はもたな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com